

令和六年 気良歌舞伎 復活二十年気良座こけら落とし公演

絵本太功記十段目 尼崎閑居の場

配役

武智十兵衛光秀
たけちじゆうびょうえみつひで

光秀妻 操
みさお

光秀母 皐月
さつき

光秀一子 十次郎光慶
じゅうじろうみつよし

十次郎許嫁 初菊
はつぎく

真柴筑前守久吉
ましばちくぜんのかみひさよし

加藤虎之助正清
かとうとらのすけまさきよ

四天王

◆一間へ入にける。残る蕾の花一つ、水揚げかねし風情にて、思案投げ首しおるゝばかり、ようよう涙おしとどめ

十次郎 母様にもばば様にも、これ今生の暇乞い。この身の願いかのうたれば、思いおくこと、さらになし。

◆十八年がその間、ご恩は海山かえがたし、討ち死にするは武士の習いと思し召しわけられて、先立つ不孝は許してたべ。

十次郎 二つにはまた初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互いの身の仕合わせ。わしがことは思いきり、他家へ縁付きして下されや。

◆討ち死にと聞くならば、さこそ嘆かん不憫やと、孝と恋との思いの海、隔つ一間に初菊が立ち聞く涙転び出で、わつとばかりに泣き出せば、はつと驚き口に手を当て

十次郎 ア、これ、声が高い初菊殿、さては様子を。

初菊 アイ、残らず聞いておりました。夫の討ち死に遊ばすを、妻が知らいでなんとしよう。

◆二世も三世も夫婦じゃと思っているに情けない盃せぬが仕合わせとは

初菊 あんまり聞こえぬ、光慶様。

◆祝言さえも済まぬうち、討ち死には曲がない。わしやなんぼうでも殺しはせぬ、思いとまって給われと、すがり嘆けば

十次郎 ア、これ、こなたも武士の娘じゃないか。十次郎が討ち死にはかねての覚悟。ばば様に泣き顔見せ、

もし覚られたら未来永々縁切るぞや

初菊 エエ。

十次郎 ササ、こういううち時刻がのびる。その鎧櫃、ここへ、ここへ。時延びるほど不覚のもと。聞き分

けないか。

◆と叱られて、いとしい夫が討ち死にの、門出の物の具付けるのが、どう急がるものぞいのと、泣く泣く取り出す緋緘の、鎧の袖にふりかかる

◆雨が涙の母親は、白木にかわらけ白髪のはば、長柄の銚子蝶花形、門出を祝う鬘斗昆布、結ぶは親と小手脛当、六具かたむる
三々九度、この世の縁や割小札、猪首に着なす鍬形の、あたり眩き出で立ちは、爽やかなりその骨柄

皐月 才あつぱれ武者ぶり勇ましし。功名手柄を見るような祝言と出陣を一緒の盃、さあさあ早う。
めでたい、めでたい嫁御寮。

◆悦ぶ程猶いやます名残り、こんな殿御を持ちながら、これが別れの盃かと、悲しさ隠す笑い顔、随分お手柄功名して
初菊 せめて今宵は凱陣を。

◆あとは得言わずくいしぼる、胸は八千代の玉椿、散りてはかなき心根を、察しやつたる十次郎、包む波と忍びの緒、絞りかねたる
ばかりなり。哀れをここに吹き送る風がもてる攻め太鼓。気を取り直しつ立ち上がり

十次郎 いずれもさらば。

◆と言い捨てて思い切つたる鎧の袖、行方しれずなりにけり。のう悲しやと泣きいる初菊、ばばも操も顔見合わせ

皐月 嫁御。可愛や、あつたら武士を、むぎむぎ殺しにやりました。のう初菊、十次郎が討ち死にの出陣とは知りながら、なまなか留めて主殺しの、憂き死に恥をさらそうより、健気な討ち死にさせんため、
祝言によそへて盃さしたの、暇乞いやら二つには、心残りの無いようと、思い余つた三々九度、

ばばが心のせつなさを推量してたもえのう。

◆初めて明かす老母の節義、聞く初菊も母親も、一度にどうと伏し転び、前後不覚に泣き叫ぶ。

襖押し開け何気のう、つかつか出ずる以前の旅僧

久吉 これこれかみさま、風呂の湯が沸きました。どなたかお入りなされませ。

◆言うにこなたは泣き顔隠し

皐月 オオ、それは御苦勞さりながら、年寄りに新湯は毒、あとは若い女子ども、マアマアお先へご出家か

ら。

久吉 いかさま、湯の辞儀は水とやら。さようなればご遠慮なしに、お先へまいる。

◆と立ち上がれば、三人は涙押し包み、奥の仏間と湯殿口

入るや月もる片庇、ここに刈り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現れ出てたる武智光秀。

光秀 必定、久吉このうちに、忍びいるこそ、屈竟いち。

◆只一討ちと気は張弓、心はやたけ藪垣の、見越しの竹をひっそぎ槍。小田の蛙のなく音をば、止めて敵にさとられじと、差し足技

き足うかがいより、聞こゆる物音心得たりと、突っ込む手練の槍先に、わっとたまぎる女の泣き声、合点行かずと引き出す手負い、

真柴にあらで真実の母の皐月が七転八倒

光秀 こは母人か。

◆残念至極の計りにて、さすがの武智も仰天し、ただ茫然たるばかりなり。声聞きつけて駆け出る操、初菊もるとも走り出で

操　　のう母様か情けない、この有様は何事ぞ、お心たしかに。

操・初菊　もつてたも。

◆すがり嘆けば目を見開き

皐　月　嘆くまい、嘆くまい。内大臣春永という、主君を害せし武智が一類、かくなり果つるは理の当然、系図

正しき我が家を逆賊非道と名を汚す、不孝者とも悪人とも、たとえがたなき人非人。

◆不義の富貴は浮かべる雲、主君を討って功名顔、たとえ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも劣りしとは知らざるか。

皐　月　主に背かず親につかえ、仁義忠孝の道さえ立たば、もつそう飯の切米も、

◆百万石に勝るぞや

皐　月　おのれが心ただひとつで、しるしは目前これを見よ。武士の命を絶つ刃も多いにこのようなひとつそ

ぎ竹の猪突き槍。

◆主を殺した天罰の、報いは親にもこの通りと、槍の穂先に手をかけて、えぐり苦しむ気丈の手負い。妻は涙にむせかえり。

操　　これ見たまえ、光秀殿。

◆戦の門出にくれぐれも、お諫め申したそのときに、思いとまつてたまわらば、こうした嘆きはあるまいに

操　　知らぬこととは言いながら、現在母御。

光　秀　こりや。

◆手にかけて、殺すというは何事ぞいのう

操　　せめて母御のご最後に、善心に立ち返ると、たった一言聞かせてたべ。

◆拜むわいのと手を合わせ、諫めつ泣きつ一筋に、夫を思う恨み泣き。操の鏡くもりなき、涙にまことあらわせり。光秀は声荒らげ

光　秀　　ヤアちよございなる諫言立て、無益の舌の根動かすな。遺恨重なる小田春永、もちろん三代相恩の主

君でない。我が諫めを用いずして神社仏閣を破却なし、悪逆日々に増長すれば、武門の習い天下の

ため、討つ取つたるは我が器量、武王は殷の紂王を討ち、北条義時は帝を流し奉る。和漢ともに

無道の君を弑するは、民を安むる英傑の志、女童の知る事でない。すされ、すされ、すさりお

ろ。

◆と光秀が、一心変ぜぬ勇氣の顔色、取りつく島もなかりしが。折しも聞こゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響き、あわやと見やる

表口。数ヶ所の手疵に血は滝津瀬、刀を杖によろぼいよろぼい、立ち帰つたる武智が一子、庭先に大息つき

十次郎　　親人、これにおわするや。

◆言つも苦しき断末魔そのままそこに倒れ伏す。見るに驚く母親より娘はそばに走り寄り

初　菊　　のう痛わしや十次郎様、ばば様といいい前まで、この有様は情けない。お心たしかに持ってたべ。

◆やいのやいのと取りついて、介抱如才泣くばかり　光秀声荒らげ

光　秀　　ヤア不覚なり十次郎、仔細は何と、様子はいかに。

水を持って。

こりや十次郎、もはや戦場ではない。父じゃ、父じゃ。

十次郎 父上……

光 秀 戦場の様子心もとない。つぶさに語れ。

◆と呼ばれば、はつと心を取り直し

十次郎 親人の指図に任せ、手勢すぐって三千余騎、浜手の方に陣所をかため、今や帰国と相待つところ

◆敵はそれとも白浪の、艦を押し切って陸地につきつけ

十次郎 追い追い都へはせのぼり、真柴が軍勢ござんなれと

◆ときを作つて味方の軍兵、縦横無尽になきたつれば、不意をうたれて敵は敗亡、狼狽え騒ぐを追つ立て、追つめ、ここを先途と

戦ううち、うしろの方より大音上。真柴筑前守久吉の家臣加藤正清これにあり

十次郎 逆賊。

光 秀 ナナなんと。

十次郎 武智が小わつぱども、目にもの見せてくれんずと。

◆言うより早く太刀抜きかざし、四角八面に切り立てられ、瞬く間に味方の軍卒、残らず討ち死につかまつり

十次郎 無念、無念ながらもただ一騎、立ち帰つて候。

◆息つきあえず物語れば、光秀いかりの髪逆立ち

光 秀 ヤア言い甲斐なき味方のやつばら。してして四王天但馬は、但馬は。

十次郎 さん候、四王天目指すは久吉一人と、昨朝よりの一気駆け、乱軍なれば生死のほど、たしかにそ

れと承うけたまわらず。親人の御身おんみの上うえ、ここに御座ござあつては、危ううし危ううし。一時へんしも早く本国へ引きとり
たまえ、ササ早く早く。

◆深手を臆てておやせず父親を氣遣きづこう孫の孝行心、聞くに老母はせきかねて

臯月 これ、これを聞きや嫁女よめじよ、その身の手疵てきずは苦にもせず、極悪人の忤せがれめを、大事に思う孫が孝心。ヤイ
光秀、子ふびんは不憫ではないか、可愛いとは思わぬかやい。おのれが心ただ一つで、愛いとし可愛かわいの初孫ういまごを
忠と義心に健気けなげなる討ち死にでもさすことか、逆賊ぎやくぞく非道と名を汚けがし、殺すは何の因果いんがぞや。

◆せぐり苦しき老いの身の、声聞きつけて十次郎

十次郎 ヤア、そんならば様には、御生害ごしようがいあそばしたか。今生こんじようのお暇いとまご乞こい、今一度お顔が見たけれど、も
う目が見えぬ。父上はわ、母様、初・・・初菊殿。

◆名残なごりおしやと手を取って、妹背いもせの別れ愛着あいじやくの、道に引かるるいじらしさ

臯月 うるさの娑婆に残らんより、孫と一緒に死出しでさんず三途。

十次郎 私もお供いたしまする。

そのまま息は絶えにけり

さすが勇氣の光秀も、親の慈悲心じひしん子ゆえの闇りんね、輪廻の絆に締めつけられ、こたえかねてはらはらはら雨か涙の汐境、浪立ち騒ぐこと
くなり。

又も聞こゆる人馬の物音、光秀聞くよりつつ立ちあがり

光秀 あの時音は敵か味方か、勝利はいかに。

◆と庭先のすね木の松ヶ枝、踏みしめ踏みしめよじ登り、眼下の村手をきつと見下ろし

光秀 寄せたりな寄せたりな、和田の岬の左手より、追い追いつくあまたの兵船。千生瓢の馬印は、疑

いもなき真柴久吉。風をくらってこの家を逃げ延び、手勢引き具し光秀を、討取る手立と覚えたり。

◆言うより早くひらりと飛び降り

光秀 草履つかみの猿面冠者、いでひとひしぎに、ひしいでくれん。

◆勢い込んで駆け出すを

久吉 ヤアヤア武智十兵衛光秀。しばらく待て。真柴筑前守久吉。

正清 加藤虎之助正清。

久吉 今改めて

久吉・正清 見参、見参

光秀 何が何と。

正清 いかにか光秀、汝都本能寺において、主君春永を討って立ち退く大逆臣、加藤正清向こうたり、い

ざ尋常に勝負、勝負。

◆勝負勝負と呼ばわたり

光秀 ヤア珍しや真柴久吉、武智十兵衛光秀が、この世の引導渡してくれん。

◆太刀に手をかけ詰め寄せれば

久吉 せいitariな光秀、俱ともに天を戴いたかぬ、亡君ぼうくんの弔とむらい戦いくさ。今ここで討ち取っては義あつて勇を失うしのう道理。
諸国の武士に久吉が軍功ぐんこうを知らさんがため、時日じじつを移さず山崎にて、勝負しゆうの雌雄しゆうを決すべし、いかに、
いかに。

光秀 さすがの久吉よく言うたり。我も惟任將軍これとうと勅許ちよつきよを受けし身の本懐ほんかい、ひとまず都へ立ち帰り、

京洛中きやうらくちゆうの者どもへ、地子じしを赦ゆるすも母への追善ついぜん。互たいの運えは天王山、洞ヶ峠たうがとうに陣所を構え。

◆ただ一戦にかけ崩さん

光秀 首を洗ってお待ちやれ久吉。

久吉 才才何さ何さ。たとえ項羽こううが勇ありとも、我また孫呉そんごが秘術をふるい。

◆千変万化にかけなやまし

久吉 その時ぬかるな加藤正清。

正清 おおせにや。

◆及ぶべき

正清 君のごいせい頭ことうにいただき、正清先陣ことうこうむらば。

◆近江路おうみじに出城でじろを構え、むこうやつばらいちちに、突き立て、突き伏せ、追いまくらん

正清 ご安堵あれや我が君さま。

◆^{いさみ}勇立たつたる若者は朝鮮国の果てまでも、その名は代々よよに知られたり

久吉　　まずそれまでは武智じゆうびようえ十兵衛光秀。

光秀　　真柴ちくぜんのかみ筑前守久吉。

久吉　　さらば。

三人　　さらば。

◆写す絵本の太功記と末の世までも。

(幕)